

瀬戸内・四国地域の 観光地域創生プロジェクト

せとうち観光専門職短期大学
安村 克己 学長



四国旅客鉄道株式会社（JR 四国）
四之宮 和幸 社長



【内田】

今回の対談でファシリテーターを務めます、せとうち観光専門職短期大学、観光振興学科、学科長の内田と申します。よろしくお願いいたします。

そして日本で初めての観光学博士、せとうち観光専門職短期大学の安村克己学長です。

【安村】

よろしくお願いいたします。

今日は JR 四国の四之宮社長様と鉄道と観光についての接点で、色々お話を伺いたと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【内田】

それでは四之宮社長のご紹介をさせていただきます。今回の対談相手は四国旅客鉄道株式会社（JR 四国）の代表取締役社長の四之宮和幸様です。四之宮社長、どうぞよろしくお願いいたします。

【四之宮】

よろしくお願いいたします。

観光産業は四国にとって大事な成長産業だと思っています。その観光産業に携わる人材を育成する教育機関の学長であり、日本で初めて観光学の博士となられた安村学長様とお話できることを、大変楽しみにしております。

【安村】

ありがとうございます。

【四之宮】

当社グループに少し触れさせていただきますと、鉄道事業を中心に様々な事業を、四国中に展開しております。人口減が進む四国にとって、交流人口の拡大や関係人口の拡大というの

は、非常に重要で当社グループとも密切な関係にあります。そんな中、御校のホームページを拝見した際に「キャンパスは瀬戸内海」というキャッチコピーに目を引かれ、私が毎日見ている瀬戸内を、世界から注目されるエリアとするために、人材育成に取り組んでいच्छゃると受け止めました。

今日の対談により、私どもにとっても何かヒントを発見したいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

【内田】

ありがとうございます。

それでは最初の話題になりますが、「観光の意味の変遷と歴史」という、ちょっと硬いテーマをスタートで使いたいと思います。現在、日本各地で地域創生の取り組みとして、観光に力を入れていこうとする流れがあり、幅広い意味で観光という言葉が使われています。

まず始めは、安村学長から観光学を学び始めた頃から、観光の意味の変遷や歴史についてご紹介させていただきます。

【安村】

観光の言葉とその意味、それから次に私の観光研究について、お話しさせていただきたいと思います。まず観光という言葉ですが、これは幕末、江戸時代の終わり頃に使われたという記録があるようです。この観光の語源というのは、元々中国の周の時代の易経という書物、儒教の経典に四書五経というのが



ありますが、そのうちの一つであると言われております。その中で「国の光を観るともって王の賓たるに利し」という、短い文章があります。光を観るということ、それは国というのは地域のようなものだと思うのですが、その地域の魅力である光、これを客に見てもらうことは、客をもてなすことに良いことだ、という意味として使われ、それが元々の観光の意味であったと言われております。

江戸時代の最後の方、時代の変わり目だと思うのですが、その頃に観光丸と命名された船があり、それはオランダから蒸気船を送られ、それに徳川幕府が観光丸と名付けたようです。どんな目的かというと、その観光丸で欧米の近代化を視察に行こうと、こういうことだったと思うんですね。先ほど申し上げたように観光というのは光、国の光を見るということで高尚、格調のある言葉ということだと思いますね。その後、明治維新で日本の近代化が始まるとツーリズムという言葉が入ってきます。最初にその訳語は、「漫遊」とされ、漫才の漫に遊ぶという風に訳されていたようです。これは現代の観光の、我々が日常的に使う観光の言葉の意味と近いんじゃないかと思います。

ツーリズムというのは、欧米の旅行のような楽しみを目的とする意味が強かったようです。今の日本人の観光観も変わってきています。例えば瀬戸内海の景色を見るなんて、あまり日本人は考えてなかったわけですね。ところが日本人も同じように、「この景色は素晴

らしいね。」と、今までずっとあった風景が美しい風景として見るようになりました。そして観光という言葉が今のように、漫遊の意味で楽しみの旅行として使われたのは大正時代だと言われているようです。大正期から現在に至るまでその観光というのが、楽しみの旅行として使われてきたということだと思います。

近頃になると、猫も杓子もと言っていいほど、観光するようになってきました。これはもう観光客も含めて、観光関係者の数だけ観光があるというような、みんなが観光について見解を持っています。特に観光によく出かけるような観光客は、私が観光だというような、そういう言い方をするので、ちょっと観光研究の影が薄くなってるような気がしています。

私は 25 年ぐらい前から観光の研究をやっております。始めは社会学理論をやっていましたが、一度バリ島に行ったときに、観光というのはすごい社会現象だなと感じました。この社会現象を研究の対象としてやってみようと思ったのがきっかけです。

しかし厳しかったです。周りから「観光なんて学問の対象じゃないでしょう」なんてことを言われました。欧米でもそのように言われていたようです。当時、観光研究が進んでいるカナダのレスブリッジ大学というところへ行ったのですが、そこで「研究の対象は何？」と聞かれ「観光だ」と答えると「そんなもんやってんのか」と言われました。カナダって観光の研究の先進国だと思っていたのでちょっとびっくりしました。

私は先ほど申し上げたように色々な観光の意味があるのですが、観光はもう本来の観光の語源である、国、地域の光を見たり、見せたりする、というところに戻った方がいいのではなかという風に考えてるんですね。

観光というと例えばディズニーランドに楽しみに行ったり、あるいはニセコでスキーリゾートに行ったり、あるいは奈良や京都の伝統文化を見る、学ぶとかですね。この中で奈良や京都に行って、伝統や文化、あるいは神社や自然の中に触れ親しむというのは観光だと思います。しかし、ディズニーランドに行ったり、ニセコでスキーをしたりするのは、もう観光から外して、レクリエーションと呼んだ方が私はいいんじゃないかと思います。

地域の光、魅力は、観光対象、観光資源と言ってもいいと思うのですが、そういったものを見たり、見せたりする、こういうことを観光と呼んだ方がいいのではと思っています。

もう四半世紀前になりますけども、「観光まちづくり」という言葉が出てまいりまして、特に国土交通省は盛んに推奨しています。「観光まちづくり」自体は下積みが 10 年ぐらいあります。その間に、例えば湯布院、長浜、小布施、遠野、そういうところも研究して、大変興味を感じました。松坂市の山奥に柚原という村があります。ここも教科書に載っていますが、そこはおばあちゃんたちが、自分たちで色々な山菜の料理を作って、ついには食事処までやって、観光まちづくりというのを、村全体でやるようになってきたのです。その村には 10 年間ほど通いまして、フィールド調査をやってきたという経緯があります。「観光まちづくり」の特徴というのは住民が積極的に、主体的に、関わっているということが 1 つですね。それから住民が協力して、自分たちの日常見慣れていたような文化や自然というのを磨き上げて、それを観光対象にして、観光客に来てもらう、その時に来た人の目線で、自分たちの大切な光、地域の魅力を評価してもらうということ。そしてまた交流をする、そういうところに「観光まちづくり」の特徴があると思います。

この時の観光というのがまさに地域の光を見る、見せるということだという風に感じていま

す。これは山奥や農村地帯ばかりじゃありませんので、町でもこういう文化が残ってるところはあると思います。そうすると地域、それから交通機関としての鉄道ですね。そこに観光がどういう風に結びついてくるのか。今日はこの辺りを是非、四之宮社長とお話できればなと、思います。

【内田】

今のお話の中で、地域振興、観光まちづくりに関して四之宮社長はとてもご興味ご関心をお持ちだと伺っております。その辺りを含めまして、JR 四国に入社したきっかけや、四国の駅を中心に、地域を元気にするというあたりについて教えていただければと思います。

【四之宮】

最初に JR 四国に入社したきっかけですが、学生時代は、大学で土木系の中でも交通土木という、人の動き、パーソントリップみたいな勉強をしていました。私の入社は平成元年ということで、前の年の昭和 63 年に瀬戸大橋が完成しました。私は愛媛の出身だったのもあって、愛媛の西条の方から大阪までフェリーで通ってました。その頃、瀬戸大橋がだんだんできていくなあと思ってる中で、橋が完成すれば四国のまちづくりがぼんやりとですが、なにかこう進むんじゃないかなといった思いで、JR 四国を選んだという形です。入社目的はそういうところですよ。

【内田】

その後の JR 四国でのまちづくりや地域振興の取り組みを教えていただければと思います。



【四之宮】

今、JR 四国は将来のありたい姿というのを掲げております。

鉄道中心としたモビリティの提供と、まちづくりを通じて、様々な事業を展開して、交流人口の拡大と地域の発展に貢献するとともに、新しい価値・サービスの創造にチャレンジすることで、従業員が誇りを持って

生き生きと働ける企業グループという風に考えております。

先ほど安村学長の話にもありましたが、鉄道とまちづくりというのは、大変密接な関係があります。いわゆる交通まちづくり、駅まちづくりということが言葉としてあります。「住んでよし、訪れてよし」という、言葉があって、観光立国の報告書でも、日本が目指す観光立国の理念として掲げられたということでもあります。先ほど学長も言われていた、住んでる人の思いもあって、自らの地域を愛して誇りを持って暮らしているなら、おのずと誰しもが訪れたいくなるという、どちらかというと住んでる人の暮らしを見に人が来るみたいな、そういうところを象徴してるのだという風に思っています。

私どもの場合は、四国中に鉄道のネットワークがあります。地域ごとにそれぞれの課題やニーズがあるということで、このまちづくりもそれぞれの地域の課題やニーズに応じても、十人十色といった関係かなと思っています。その中でご利用が多い四国の県庁所在地でいきますと、ここはやはり県を中心ということもありますので、いろんな目的の方が駅の周りにい

らっしゃいます。鉄道を乗り継ぐ人、あるいは鉄道からバスへ乗り継ぐ人だけでなく、駅の周辺の色々な公共施設、あるいは高松でいえばアリーナの開業や私どものホテルもあったり、そういう多目的な方がいらっしゃる空間なので、複数の多目的な方が、そこで集えることもらみながら、自分とこの土地だけじゃなく、周辺と連携したまちづくりというのが求められてるんだらうなということで、今取り組んでいるというような状況であります。

これ以外にも、例えば県庁所在地ではない坂出市も駅の周辺のまちづくりが進んでいます。元々、高架事業という形で駅前に空間ができたわけですが、どちらかというと今まで坂出は働く人の町だったところ、働く人、さらにはそこに住む人の町を作ろうという形で、町のリビングと言える施設の整備というのが始まっています。子育て世代を始め、学生、さらには来訪者も含めて、そこで集える空間を作ろうという形があります。

人口問題では、香川の特に複線化のエリア区間という、ここ高松を含めて残りの県庁所在地の駅というのは、四国から人口が流出している問題に対して、人口ダムの役割があるのではないかと考えています。この辺りを JR 四国は自治体と一緒に進めているというところでございます。

【内田】

ありがとうございます。これに対して学長はいかがでしょう。

【安村】

観光については、特に JR 四国様で、観光列車等々の施策もあると思います。

その他、駅周辺や、坂出の例も出していただきましたが、整備をすると、そこに色々な訪問者が来るということもあり、特に観光を意識しての、方策や地域との関わりというのはありますか？

【四之宮】

ここは、多分大きく 2 つあって、先ほどの鉄道会社ということであれば、実は目的地まで鉄道だけではなかなか行けないということもあります。先ほど学長がおっしゃった、観光地になるところが、実は駅から離れた場所、例えば西阿波の山の中の暮らしを見たい方は大歩危まで行って、そこからの交通手段が大事だということです。我々公共交通ネットワークの四国モデルという言い方で、駅を降りてから次のアクセス、この接続を分かりやすく利用していただけるように取り組んでいます。

もう 1 つは、今はインバウンドの方が先に SNS でいろんな情報を発信します。例えば父母ヶ浜はこの 10 年内の盛り上がりですが、まずは日本の方にも四国の隠れた観光地、必ずしもメジャーではないのですが、色々な魅力あるスポットがあるところを知ってもらいたいということです。都市圏の方たちに情報発信するというのが、鉄道は繋がってるというメリットがあるので、JR 他社さんとも連携しながら、ディステーションキャンペーンというものを国鉄時代より続けていまして、四国もここ最近 2 回くらい四国エリア全体として、どんな魅力があるのか発信してきました。例えば食だけでも四国 4 県は色々な違いがありますという風に、あるテーマを四国の中で横串を刺してエリア全体の魅力を情報発信するということもしています。

【安村】

地域によっては車窓から素晴らしい景色が見られるということで、観光列車を走らせている

ということですが、私の友人も鉄道が好きで、とにかく乗ることが好き、車窓から色々な素晴らしい景色を見るという、とにかく時間が長いのがいいと言うんですね。私なんかは新幹線でパーって行ってしまうのですが、それを言う「いやそんなの面白くないでしょ」と。長い時間ずっと乗ってる、そういうところへの気配りも色々考えておられるところはあるのでしょうか？

【四之宮】

鉄道は元々派生的需要で目的地に行くまでなので、学長が言うようにできるだけ早く行くのが本来の役割ですが、もう一方で本源的需要でわざわざ乗ってみたい、ゆっくりと鉄道列車の旅を楽しみたいというニーズがあります。今は日本中で色々な観光列車が移動のためではなく、その列車の中で空間を楽しむ



ための観光列車というのがありまして、私どもも今3つの観光列車を走らせていますが、いずれも途中では車窓を見るためにゆっくり運転します。鉄道の運転士からしたら普通は早く行かなければという感じですが、わざわざ徐行して、沿線からの風景や手を振っていただく方に、顔が見えるような形でゆっくり動かすみたいなのがあります。ここ10年ほどの中でそういった動きが日本中で出てきて、さらにはそれをインバウンドの方たちが乗って喜ぶという、お客様に対して手を振るということはアメイジングな世界らしくてですね。大変喜んでいただいているという状況です。

【安村】

素晴らしいですね。四国で四之宮社長がお勧めの車窓の景色はございますか？

【四之宮】

皆さんおっしゃるのは、やっぱり瀬戸内ですね。私は瀬戸内海に面した土地の生まれですし、毎日家から瀬戸内海を見てますけど、ほとんどそんなに波がないところです。多少、波があっても大したことはないです。全国からいらっしゃったお客様は、とにかく波がない穏やかな海。この瀬戸の魅力というのは、特に四国から見るのは北を向いていますよね。あれがいいというお客様が多いですね。南を向いてると太陽の光が入って、ちょっと見え方が変わりますが、北を向かって瀬戸内海を見ると大変綺麗に見えるという形で、これが住んでる者には分からないぐらいの魅力があるという形なんですね。そういう意味でいきますと、この辺りも香川の詫間の辺りもしまなみ辺りも大変綺麗ですし、伊予灘ものがたり列車が走っています、いわゆる伊予灘の辺りも、大変綺麗な景色が見えると思います。

【安村】

私は初めて四国に来たのが7年ぐらい前です。あの時、瀬戸大橋を渡ったマリンライナーは本当に感動しました。

江戸時代の外国人の旅行記があり、長崎から江戸まで行くのに瀬戸内海を通っていくと、小さい船が色々出て、そこで褐色の肌の男が白いふんどし姿で船を漕いでいるというのが素晴

らしい景色で、高松城も見えるというような描写がありました。それを彷彿としたことがありまして、今の話ですが外国人もみんな身を乗り出すように、瀬戸大橋で海を見てますけどあれ本当に素晴らしい景色ですね。

【四之宮】

そうですね。瀬戸大橋は本当に夕日の時も綺麗ですし、インバウンドの方は動画で撮ってますね。日本人の方でも「うわあ、船が整列してる」「整列して船が動いてる」みたいな。私たちからしたら見慣れた風景ですけど、そこに感動していただいてるお客様もいらっしゃいますね。

【内田】

ありがとうございます。では次に、人材育成、観光人材の育成をテーマに四之宮社長のご経験を伺いたいと思います。

これまで JR 四国でお仕事をされてきて、最も印象的な出来事や自分自身に大きく成長をもたらしてくれたような経験をお話いただければと思います。

【四之宮】

元々、まちづくりがしたくて JR 四国に入社したわけですが、2001 年から 3 年間、徳島にありますホテルとショッピングセンターを運営してる子会社に出向しまして、その時、たくさん仕事を経験し、総務部次長と総務課長と施設課長と営業部次長をやらせていただきました。その中でも一番印象に残っているのは、ホテルの総支配人、総調理長ですね。あとは宿泊支配人といった本当のプロの方たちと、色々仕事をさせていただくことができました。そして彼らに教えていただいた、お客様の満足度を高めるために、いかに汗をかき、知恵を出すか、お客様に喜んでいただけることが大切だということですね。

どちらかというと鉄道はマニュアルに従って、目的地までお運びするというやるべきことだけを淡々とやっていますが、ああいう世界ではお客様に無理難題を言われる方が喜ぶ、じゃあそれに応えるために、という鉄道会社とちょっと真逆だなという形だったのです。

改めて考えると、これからの地方に求められているのも、高付加価値のサービスみたいなところなので、四国に求められるのは、大量じゃなく少人数の方たちに対しての満足度を高めるための、取り組みが大事だと思っています。その時本当に色々叱られもしましたが、サービスとはこういうものだということを教えていただきました。

【安村】

素晴らしいですね。確かに公共の交通機関として安全ということが一番、まさにそれがサービスになるかと思うのですが、個別のサービスも必要だということがホテルの経験から感じ取れたことですね。

【四之宮】

そういう意味ですと、先ほどの観光列車もその対極の方ですね。いかにお客様の満足度を高めるかみたいなのところに、みんなが知恵を出して色々改善をしていくというところがあります。

【安村】

安全とスケジュール通りというよりも、それにプラスして個別のサービスということですか？

【四之宮】

そうですね。ホテルも同じで当然安全問題、サービス問題とか、品質問題とかやらなければならない。でもそれだけではやっぱりお客様は満足してくれないので、期待を上回るようなサービスが必要だというようなことを、大変感じたわけです。



【内田】

今の四之宮社長のお話で、JR 四国、 JR という日本の基幹にある鉄道事業というのが、鉄道ではないところも広くカバーしていて、この動画を見ているの方々が鉄道会社というのは鉄道以外のこともたくさんやっているんだということを知っていただけたと思います。

他にも「あ、これも JR だったのか」というようなお仕事がありましたら、ぜひお願いします。

【四之宮】

最近やってますのは、サーモンの陸上養殖を始めまして、鉄道というのはいろんなことができる会社なんですね。従業員から色々なアイデアを募集しており、社外からも提案を受け入れています。その中でこれからやってくる食の問題、魚の問題があり、陸上養殖というのが提案にありました。勉強していく中で「ああ、こういう世界もあるんだな」と初めての経験でした。

今は普通にサーモンを食べることができますが、いずれ輸入が難しくなってくるような時代もある中で、サーモンの陸上養殖に挑戦中です。それも地下水の掛け流し方式で、海水でやる循環型とはちょっと違って、立地条件が限られるので、どこでもできるわけじゃないんです。「地下水は菌がないので安全なサーモンができる」という企業さんと出会い、そことコラボして年末から一部初出荷という形になります。これは四国外でやっていますが、四国でも愛媛県の西条市に石鎚の地下水がたくさんありますので、西条市で早ければ4月頃から陸上養殖のためのプラントを作り、順序良くいけば来年からサーモンが四国の中で出荷できる場所です。JR 四国の若い社員が今そこに携わっているわけですが、こういったことが最近の新しい仕事です。

【内田】

ありがとうございます。

人材育成のお話を少し広げさせていただきますが、学生は様々な経験や人との出会いから、学びを得て成長していくと思います。

企業は入社してから人材育成を考えておられると思いますが、四国全域の活性化に関わる JR

四国としてはどのような若者を迎え入れて、どのように育てていきたいかという辺りを是非ともお話いただければと思います。

【四之宮】

当社は鉄道会社が主体ですが、その他、四国に根差した様々な事業を展開しているということです。四国に元気と活力がないと、当社の発展もないということで、自分たちの力で四国をなんとかしてやろうという熱い、情熱を持った方を求めています。

入社してからは、まずは最初 3 週間ぐらい、研修センター施設を持っていますので、そこで研修して、最低限必要な基礎的な知識を習得して、そこから次は現場に行きます。先輩がマンツーマンで教える OJT を通して、業務に従事していただくという形になります。

当社としては、グッドチャレンジの精神で行動できる、生き生きと働ける職場づくりを目指してるので、各ステージごとの様々な研修も用意しています。JR 四国グループだけでなく、社外との交流をするような研修や、それぞれの方に応じた研修をやっているという状況です。

【内田】

JR 四国もどんどん新しい世代が入社してくると思いますが、最近入社してくる Z 世代に対して、思っておられることをお願いします。

【四之宮】

直接、採用に携わる場面があまりなくなってきましたが、採用担当から聞くと今の若い人達は、自らのキャリアイメージを明確に持たれていて、仕事のやりがいとか、成長できる環境を求めている若い方が多いという、非常に頼もしく感じています。入社後もスキルアップに積極的な方が多いと感じてることなので、先ほど申しましたように会社としても、若い段階から社内だけじゃなくて社外の方とも、交流できるような、そういった研修を作っているという状況です。

【内田】

JR 四国には様々な分野の学生が入社を希望されると思いますが、本日の対談させていただいている私どもせと短の学生は、観光を学んできた学生です。ちょっと特殊かもしれませんが、せと短の出身者で御社への就職を希望する学生に対し、望むようなことがございましたらよろしくお願いします。

【四之宮】

大変期待しております。先ほども申しました通り、JR 四国は地域の観光資源を活用して、鉄道の利用もさることながら、地域が元気にならなくてはいけないというところで取り組んでいます。そういう意味でいうと、四国の観光資源、あるいは文化資源もですが、実はいいものがあるということに気づいていないケースがたくさんあります。そういったところを地域と一緒に掘り起こせるような人材を求めています。

さらには、その情報をいかにして都会やインバウンドの方に発信していくか、こういった大きく 2 つの人材が今の四国にとっては必要な人材と思っています。この辺りについて、専門教育機関であるせと短は、私どものニーズにマッチする、あるいはその素材となるような基礎的な知識のところを、身につけていただける学校だと期待しております。

【内田】

ありがとうございます。学長、それに対していかがですか？



【安村】

実は、本年度も2名の学生を採用していただきました。本当にありがとうございます。

ちょっと鍛え方が足りなかったかなと、心配はしているのですが、先ほどお聞きしたように、入社してから大変素晴らしいプログラムで鍛えていただけるようなので、どのように

成長するか楽しみにしております。

私どもは、2021年4月に開学したんですが、コロナ禍の真っ只中でございまして、もうそのとき以来、学生募集に大変苦勞しております。コロナ禍で苦勞している観光分野に進学したくないという学生が多い中で、それでも観光の大学に進学したいという想いを持って、入学した学生もいます。やる気だけはあると自負しています。それから観光や地域ということに、彼らは熱い思いを持っています。これから新たにいろんな学びをさせて、鍛えていきたいと思っていますので、また是非、JR四国の門をたたき時はよろしくお願いしたいと思っています。

【四之宮】

学生時代を、この高松で過ごすことの価値って非常に大きいと思います。

大変、学生さんには期待してますので、お待ちしております。

【内田】

ありがとうございます。今の話から、企業や地域が求める若者を育てていけるように、決意を新たにしておるところでございます。観光の専門職の大学ですので、高校を出て入社するというのとはまた違って、広い視野を持って、先ほど社長がおっしゃったように、鉄道だけでなく、鉄道の周辺にある、四国を元気にする、地域を元気にする、そのような人材を育てられればいいなと思っております。ありがとうございます。

★★★★アフタートーク★★★★

— 対談を終えて —

【四之宮】

改めて思うと、香川県内で通ってる方もいらっしゃると思いますが、学生の間にこの瀬戸内エリアとか四国で、学生の間でないとできないような経験ができるのは、せと短の良いところかもしれませんね。

【安村】

「キャンパスは瀬戸内海」というキャッチフレーズですので、今後ともこれを拡充していっ

て色々な学びを作りたいなと思っています。

御社には臨地実務実習でお世話になっておりまして、これからもまた色々無理なお願いもするかと思うんですけども、ぜひよろしくお願いします。

【四之宮】

承知しました。

— 様々な部署を経験するメリットは？ —

【四之宮】

鉄道会社に入った時点で、いろんな仕事ができるかなというのはぼんやり思っていました。

特に JR 四国はいろんなことをさせてくれます。

大きな会社の技術系だったら技術の道しかないんですけど、鉄道会社、特に JR 四国はいろんな仕事ができると入社時におっしゃっていただきましたので。



当時私の時はリクルートも元気な時代だったんですよ。私は技術系ですけど、リクルートに行く人もいた時代でした。大学の時に勉強したことが直接役立たなくても、なにかがどこかで役に立つんじゃないかな、ぐらいのつもりで。

周り道はしましたが、社会人として最後に差し掛かる今になって、まちづくりに携わることができています。動き出している四国のまちづくりが、人生のどこかで自分のやりたかったところに、ぴったりとはまった感じです。

そういう長い目で選んだかなっていう感じですね。

【内田】

結果としては、大学を出て、大学院をお出になったときに、「こういうのちょっとやってみたいな」と思ったところに、たどり着いてきたって感じですか？

【四之宮】

そうですね。でも仕事というのは、どこかでなにかヒントになるところがある一方で、入社した時の気持ちを忘れないようにしなくちゃいけないなっていうこともあります。しかし、いろんなことを経験する方がもしかしたら、自分の向いてる分野が他にも見つかるかもしれませんね。

— 観光のスペシャリストに必要なこと —

【内田】

せと短は観光のスペシャリストを養成すると同時に、その背景にジェネラリストもできるよ

うに見据えているんですね。

【安村】

ジェネラリストっていうほどではないですが。

とにかく自分の人生を自分で切り開いていくような力を、学ばせたいなという思いがあるんです。

【四之宮】

おそらく学生の間だけに経験することは限られてるので、社会人になった時も本当はいろんなことを経験して、いろんなことを身につけて、最後は専門のところに行く方が、伸び代があって、ずっと限られた世界だけ通るというよりは、世の中はまさに社会学じゃないですけど、本当にいろんな動きがありますので。最初は幅広く、瀬戸内海を泳ぐように、太平洋まで行ってもいいかもしれませんが、色々泳いできて最後にプロの世界に行くっていうのもいいんじゃないかなという風に思いますね。

— JR 四国が考える人材育成 —

【安村】

学校を出て新卒の一括採用が、今の日本の企業の、非常に特徴的なところだと言われてます。同期同士で切磋琢磨して、今お話ししたように、いろんな職務って言うんですかね。仕事を経験して、だんだん自分もキャリアアップしていく。ただ、アメリカや欧米の方を見てみると、ポーンと横からトップマネジメントでも、ミドルでも、ローはそのままで。ああいう傾向に日本の企業なり、事業所なりがなっていっていますが、JR 四国の場合も含めて、どうですか？

【四之宮】

JR 四国の場合は、とは言いながら、エッセンシャルな業務で、やっぱり列車を動かすっていう業務は、これはこれである意味スペシャリストです。鉄道の運転士の世界だけでは、他の世界を知るよりも、まずは鉄道のところだけのプロの養成というところもあります。それに向いてる人はやっぱりその世界で「とことん安全確保のためには」みたいなところもありますし、おっしゃる通り、お客様のニーズって、どんどん変わっていったり、経営の視点では、実は全く違うところから経験した人の方が良かったり。会社にとっては2つの両輪があって、どちらかと言うと元々の鉄道を安全に動かすための人材は確実に育成したいというところがありますね。

JR 四国の場合は入社してからヒアリングがいっぱいあるんです。これまでの経験を元に、彼はこっちのが向いてるんじゃないかなみたいところで、大半はスペシャリストになりたいっていう人は多いのでそこを重視しています。運転士になりたいっていう人は、やっぱりそこを重視して育てていく。特に鉄道の場合は、運転士やりたいっていう人がやはり多いので、ここはできるだけ、彼らたちの夢を叶えるようにしていくという形ですね。

【四之宮】

ある意味、自然発生的に手を振ってくれております。私どものアテンダントは社員なんですが、仕事の延長で列車に乗らない時に現地へ出向いて行って、そこの人たちと交流をしていくわけですよ。そうすると彼女たちは地域のお孫さんみたいになっちゃってですね。もうむちゃくちゃ仲がいいんです。知り合いっていうか、家族みたいになってて。

だんだんそれがあっちこっちに広がっていくわけですね。それぞれお互いの距離が縮まっていったり。

あとは平成30年豪雨の時に、沿線に土砂が入り込んで、大変苦労しました。従業員がボランティア的に行って、土の掻き出しなんかも手伝ったりみたいな形もあって、沿線のコミュニティと私どもの従業員が仕事も半分ありながら、プライベートみたいなどこで繋がったところが盛り上がった一つかなと。

もう一つは、やっぱりメディアの力って大きくて、そういうことを取り上げてくれることで、自分たちの地域がニュースに出るじゃないですか。あの価値はね、やっぱりすごい。メディアの力、ネットの世界もあるけど、ああいうテレビ番組で放映されたこと自体がまた盛り上がりの一つにはなってるという相乗効果ですね。

【安村】

まちづくりの中では、住民がそこに関わってくるといのが大きいんでしょうね。自分の地域を見直したり、あの誇りを持ったり、そういうことが外の人に手を振るようなことになってくるのかなって。

【四之宮】

多分、自分たちのエリアを少し自慢できるようなところではないでしょうか。伊予灘を走っている五郎駅の近くで、シャボン玉を飛ばしてるということは、多分自分たちの住んでるところってこんなに綺麗だったり、いいとこなんだなっていうのがあると思います。ある意味さっき学長がおっしゃったように、日本は海外の人がいいと思って初めて気づく、誰かに評価してもらって初めて気づくみたいなのが、うまく循環になってるんじゃないかなと思います。